

(四) 眉月まゆづき

「私が神になろう。」

雪の舞う空を仰いで菟野うのが言った。かすかだが凜りんとしたその声は、後ろに控える中臣大嶋なかとみのおおしまの耳にはつきりどこだました。大王の死後、朝政は太后おおきさきとなつた菟野が執っているが、最近は廷臣の中にも公然と草壁の即位に反対する者が現われた。故大王の皇子みこは大勢いる。だが、何とかして可愛い一人息子を次の大王にしたい。その方策を考えるために吉野に籠もつた菟野である。

「皆の反対を抑えるためには、私が神になるしかあるまい。のう大嶋。」
大嶋は磐にひざまづくかと恭しく拝礼した。

思えば菟野の人生は、戦いの連続だった。乙巳いっしの変の年に生まれた。

蘇我蝦夷そがのえみし親子打倒のため、父中大兄皇子と祖父蘇我倉山田石川麻呂が手を結んだ。その政略結婚の末に生まれたのが太田と菟野である。

菟野が五歳の時、父中大兄が祖父石川の麻呂を殺した。父がなぜ祖父を殺したのか、幼かった菟野にはわからない。ただ、一族皆殺しにされて狂おしいまでに怒り嘆いた母の姿は、幼い菟野の脳裏に強烈に焼きついて生涯忘れることができない。癒すことのできない悲しみの中で母は男児を生んで世を去つた。権力に葬り去られた人々の恨みを一身に背負つたものか、残された弟は言葉も話せぬまま、八年の短い生涯を閉じた。

以来策謀渦巻く宮中で、後ろ盾を失つた幼い娘が必死の思いで肩肘張かたひじはつて生き抜いてきた。唐に対抗しうるような、大王中心の強力な律令国家を造ろうとして、豪族たちの反発を買つた父は、四面楚歌しめんせかの状態じょうたいで、娘を顧みる心のゆとりはなかった。十三歳で叔父大海人に嫁がされたのも、政略的な配慮によるものであった。

草壁を生んだのは筑紫。百済と共に唐・新羅連合軍との戦いが始まろうとしていた。倭王の要請で、国を挙げて筑紫へは来たものの、もともとこの戦いに乗り気ではなかった父中大兄は、筑紫朝倉宮で祖母後岡本宮大王のちのおかもとのみやのおおきみ宝が崩くずれすると、その遺体を守って、さっさと大倭やまとへ帰ってしまった。唐・新羅との間に「大倭国は敵対しない」との密約が交わされていたと言う者もいる。

当時すでに宗像氏の尼子娘との間に高市王を儲けて、倭国の豪族たちの尊崇を集めていた大海人は、兄の帰国後も筑紫に残って後続部隊の指揮を続けた。百済に出陣した倭王薩野馬が唐に捕えられると、必然的に倭国軍は大海人の指揮下に入った。百済の遺民と倭国の大軍を無事撤収させたことで、国王を失った倭国はほぼ大倭国に帰したと言っても過言ではない。

その大海人に対する唐の皇帝は三代目高宗。病弱な高宗に代わって実権を握っていたのは、妻の武后である。高宗の死後は息子を形ばかりの皇帝に据え、自ら「則天武后」と名乗って大国に君臨しているこの女人に、菟野は敵愾心を超えた複雑な好奇心を抱いている。武后は自分を「天」と言う。ならば菟野が自ら「神」を名乗ってもよいではないか。

身の引き締まる冷気の中、清冽な川水の岩を打つ音だけが轟く。この吉野の宮を造ったのは、祖母の宝である。菟野はこの祖母のすぐ腕に感服せずにはいられない。いったん嫁して子までなしていながら、女盛りを過ぎたはずの三十になって叔父田村王と再婚。更に中大兄、間人、大海人の三人を生んだ。菟野の記憶の中の祖母は、実に健康で魅力的な女人だった。十八歳で草壁独りを生んだだけの菟野には、それだけでも賛嘆に値する。

その上、当時蘇我氏の血筋でなければ大王になれなかった大倭国で、有力候補の山背王を押しつけ、蘇我の血筋ではない夫田村王を大王に押し上げたのは、宝の暗躍あつてのことと聞いている。更に夫の死後は自らも大王となった。以前にも女帝の例はあつたが、皇女であつた小墾田宮大王と違って、もともと皇位継承権のない四世の女王の即位は異例のことだった。

しかも、いったんは弟軽皇子に位を譲りながら、軽が崩御すると再びの即位。

大王位の生前讓位も、重祚も初めてのことであつた。

思えば山背王を殺したのも蘇我入鹿とされてはいるが、実際に動いたのが

軽皇子の腹心であったことからすれば、宝が全く知らなかったとは思えない。その入鹿を殺したのは菟野の父中大兄だが、後の経緯から見れば、その中心にいたのはやはり軽皇子であり、これも宝の事前の承認なくてはなし得なかったはずである。

遂には六十八歳という高齢の身で、百濟再興の為に自ら筑紫へ出兵するなど、その強靱な体力と精神力には畏怖の念すら覚えるのである。

その宝の血が、菟野の体内にも確実に流れている。

「おばあ様はここで神の声を聞かれた。夫はここで神の子になられた。だが、私はここで私自身が神になろう。」

雪が降り注ぐ。父の死の直前に、夫と共にこの吉野宮に籠った時も、やはり雪が舞っていた。

(全てがここから始まった。もう一度始めよう。負けはせぬ。)

「大王は日神の御子じゃ。日神の御子だけが大王になれる。私が日神になれば、日神の御子は草壁だけ。つまり、大王になれるのは草壁だけ。そのためには・・・日神は女神でなくてはならぬ。」

「日神が女神。女神と。はて。」

大嶋は仰天した。

「できぬか。大嶋。」

「あ。いや。何事も仰せのままに。ただ、神々の系譜を少しばかり手直しせねばなりませんので。」

亡き浄御原宮大王の命を受けて、神代の物語をまとめている大嶋である。

「早いほうが良い。誰にも悟られぬようにの。」

飛鳥に戻っても、大嶋は溜め息ばかりついている。何時の頃からか大王の権威を高めるために、大王は日神の子だと言い伝えられてきた。これはずっと昔、大王家の先祖が半島にいた頃からの言い伝えであるらしい。だが、現実の菟野は明らかに人である。これを神と言うのは余りにも不遜というほかないではないか。大嶋はとんでもない難題を抱え込んでしまった。

「難しいことを仰せだ。日神は男神だ。子供だつて知っているぞ。日神を女にすることなど無理な話だ。」

眼を閉じて身じろぎもせず耳を傾けるのは田辺史。史は大嶋の知恵袋である。大嶋が菟野の信任を得ることができたのも、実はこの男の入れ知恵による。そんな史を不安気に見守る大嶋。やがて眼を開けた史の顔が綻ぶ。

「そうでしょうか。しかし、どこに男神と書かれておりましょうや。勝手に男神と思ひ込んでおられるのではございませんか。」

大嶋は虚を衝かれたように史の笑顔に見入っていたが、我に返ると慌てて木簡を繰り出した。

「ない。確かにどこにも男神とは書いてないぞ。」

「そうでしょうとも。皆が男神だと思っ込んでいるだけです。」

「しかし、日神が男神だからこそ伊勢の神宮には未婚の皇女が遣わされているのだ。日神は男神だ。」

「確かにその通りです。もともと大陸にあった時は、日神が河神の娘に子を生ませる話だったようです。だから日神は男でなければならなかったのです。ところがこれが海を渡った時、日神の子が海神の娘に子を生ませる話に変わったのです。こうなると、日神の子は男でなければなりません。日神自身は男でも女でも構わないことになります。ですから、これを女神にしてしまえばよいのです。」

史は顔を綻ばせる。

「それだけでよいのか。」

大嶋はあつけにとられている。

「それに日神を女神とすると、かえって好都合です。これまでは日神が女神を生み、須佐男が生んだ男神を日神の御子として天下らせました。しかしこれでは、皇祖神は日神ではなくて、実は須佐男だったということになって、いかにも不都合です。しかも、須佐男が女神を生んだら負けとするのは、女人を貶めることですから、大后に対し奉り、恐れ多いことです。ですから、ここは、須佐男が女神を生んで勝つ方が良いでしょう。そのためにも、日神を女神にして須佐男と交わらせるのです。」

史がにやりと笑う。

「日神と須佐男を交わらせるなんて、そんな不謹慎な。」

大嶋が慌てて口を挟む。そんな大嶋を愉快気に眺めながら、史は語り続ける。

「構わぬではありませんか。伊耶那岐、伊耶那美の神も交わることで国々や

神々を生んだのです。男女の交わりは神聖な儀式ですぞ。」

「それはそうだが。」

「どうやら神祇伯には雑念を持って交わっておられるものとお見受けいたしましたぞ。」

「そんなことはない。」

史にからかわれて、大嶋が年甲斐もなく顔を赤らめる。

「日神は須佐男の持ち物から女神を生みます。これは須佐男の物から生まれたのですから須佐男の子です。女神を生んで須佐男は勝ちます。一方、須佐男は日神の持ち物から男神を生みます。これは日神の物から生まれたのですから日神の子です。この男神が天下ってこの国の王となるのです。」

「あつ、そうか。須佐男の子を無理に日神の子にしなくてもいいのか。」

史の説明に大嶋は舌を巻いた。合点がいった。

「となると、日神に女神らしい名前をつけねばならぬな。」

「これまでと同じように天照大神あまてらすおおかみでよいではありませんか。話を変えたことは知れない方が良いでしょう。気がついた時はだれの仕業かわからないというのがよろしいのでは。」

「それもそうだ。だがわからせた方がよい時もあるだろう。」

「さようでございますなあ。では天照日女命あまてらすひめのみことでは如何。」

「うまい、うまい。天照日女命の御子が天下ってこの国の王とられた。だからこの次も天照日女命つまり大后の御子であられる草壁皇子が大王になれるのだ。」

「そうです。そうすれば草壁皇子のご即位に異論を唱えることはできなくなります。」

史の提案は菟野を喜ばせた。

「面白いこと。よく気がつきましたね。」

「難しゅうございました。実はこれを考えたのは臣やつかれではございません。頭の良い男でございます。これまでもいつも臣を助けてくれました。」

「良い家人じゃの。」

「いえ。家人ではございません。田辺史と名乗っております。」

「百済人か。」

「いえ。近江朝の流れを汲む者でございます。今は身を謹んで養父の田辺を名乗り、ひたすら学問に専念しております。」

「はて、誰であろう。」

「実は藤原内大臣の子息でございます。博学多才にして特に律令経書に通じております。三十一歳にもなるのに出仕の機会もなく、いたずらに世に埋もれているのが惜しくなりません。」

「鎌足の息子のう。」かまたり

鎌足は菟野の父近江宮大王の懐刀と言われた男である。菟野は興味を覚えた。

「会ってみよう。」

草壁即位の準備は着々と進んでいる。だが肝心の草壁の病は重くなる一方である。阿閉は付きっ切りで看病している。草壁の魂は夢と現うつつの狭間はざまをたゆたっている。

(皇子様は何を見ておいでなのかしら。)

その草壁は独りぐるぐると池の周りを歩いてゐる。道は細い。足を踏み外すとたちどころに池に滑り落ちてしまふだろう。池の中に棲む青竜が草壁を引きずり込もうと狙っている。逃げようと、歩いて歩いても池から離れることはできない。今にも落ちそうになる草壁の体を、必死で引き上げようとしているのは誰の手だろう。

顔を歪めて苦しむ夫の手を握り締めて阿閉はただひたすら薬師如来に祈る。浄御原宮大王が発願して菟野が引き継いだ薬師寺は、畝傍山うねびの東に華麗な姿を現しつつあった。

史が中臣意美麻呂おみまろや巨勢多益須たやすらとともに刑官うたえのつかさの判事ことわるつかさに抜擢されたのは、この後すぐのことである。新しくできた「律」を取り仕切る役所である。

「兄上。今朝の判事の任官、聞かれましたか。大津兄上と一緒に捕まって、後から許された奴等が何人もいますよ。まるであの時の褒美ではありませんか。やはりあれは、あ奴等のでっち上げだったんですよ。」
弓削は拳を振り上げて悔しがる。

「川島の叔父上が密告したなんて噂、やはり根も葉もないことだったのですよ。叔父上がお気の毒です。」

「全くだ。だが、問題なのは太后がどこまでご存知だったかだな。」
長としては、できることなら、菟野を悪く言いたくはない。

「そんなこと、決まっていますよ。全て太后がやらせたのですよ。そうでなければ、こんな任官などするわけがありません。皆、近江朝の縁者ばかりですよ。」

「そうかな。太后が何もかもご存知ならここまで露骨な褒賞はなさるまい。それにしても見事な顔ぶれだな。近江朝の連中でしたら固めてしまった。父上のご存命中は小さくなっていた奴等ばかりだ。」

「太后は近江宮大王の娘ですからね。これから一体どうなるのでしょうか。」
「近江朝の文官共が肩で風を切つて歩くようになるだろうよ。だが母上だつて近江宮大王の娘だ。心配することもあるまい。太后に睨まれぬよう、おとなしく草壁兄上を立てていればよからうよ。」

若い弓削は菟野のやり方に怒りを覚えずにはいられない。長のおとなしさが歯がゆい。だが、だからと言って弓削独りに何ができよう。己の無力に苛立つばかりである。

この日の任官に疑問を持ったのは弓削一人ではない。飛鳥の東、墨坂の麓に小さな古家がある。

佐留の手が止まった。春とは名ばかりで、夜はまだまだ寒い。

「どうなさったの。」

牟久売むくめの甘ったるい声はまだ陶酔の夢の中をさまよっている。

「大津皇子様のご謀反は本当だったのだろうか。」

佐留にはどうも腑に落ちないことがある。

「もう。いや。今頃、そんなこと。もう、二年も前のことではありませぬか。」
女は焦れて脚を絡ませてくる。

「そうか。もう二年もたったのか。だが、あれがでっち上げかも知れないという噂はお前も聞いたことがあるだろう。」

「ええ、だから草壁皇子様のご病気は大津皇子様の祟りたたなのだそうですね。」

あの時の騒ぎがまざまざとよみがえる。

「そうだ。あの噂は本当かも知れぬ。今朝方判事の任官があつたのだ。中臣意美麻呂と巨勢多益須も判事になった。」

佐留は女の体から離れた。女はうずく乳房を抱いて恨めしげに見上げる。

「意美麻呂と多益須つて大津皇子様と一緒に捕まった人でしよう。」

「そうだ。皇子様だけが殺されて後の三十人ほどは許された。」

「でも、皇子様のご謀反は間違いないそうですね。行心が勧めたのですつて。」
「そうかも知れぬ。だがお前は行心独りのたわごとで謀反を起こす気になどなるか。行心を遣つて煽り立てた者がいるのではないか。」

「大津皇子様と草壁皇子様が大名児を取り合つていたそうですね。」

「草壁皇子様が汚いことなどなざるわけがない。だが皇子様に取り入ろうとする者はいるだろう。」

「それが意美麻呂と多益須だつて言うの。」

あの夜、佐留は牟久売との逢瀬の帰り、川島の宮の前で意美麻呂を見かけた。意美麻呂に近づいた不審な黒い影の存在が、佐留には引つかかつてならない。

「わからぬ。それにしても今朝の任官は近江朝の人が多かつたな。」

「律」という何やら恐ろしげな仕事をする新しい役所である。

「そうそう、史殿もおられたしな。」

「史殿つて。」

「近江朝の藤原内大臣のご子息だ。大王ご在世の頃は養父の田辺氏を名乗つて引き籠つておられたのに、今朝は堂々と藤原氏を名乗つておられた。最近はどうも宮中の空気も変わってきたようだ。」

佐留は起き上がると衣を着た。

「草壁皇子様のご容態が良くないようです。また何か起きなければ良いのですが。」

名残惜しげに見送る牟久売を残して表に出た。

「ううっ。寒っ。」

衣の襟を掻き合わせると、空を仰いだ。眉毛のような月がようやく東の空に昇ろうとしている。